

十津川の縁

vol.3

特集 | 新十津川物語



本誌は、奈良県・十津川村と北海道・新十津川町の交流を促すことを目的に制作されています。明治22年の大水害を機に、十津川村から北の大地へ2500人の人々が移り住みました。奈良と北海道、暮らす場所は分かれても、脈々と受け継がれてきた母と子の交流が、これからも続いていく一助になればと願っています。

発行 | 奈良県奥大和移住・交流推進室 0744-48-3016

あなたは『新十津川物語』を 読んだことがありますか？

『新十津川物語』は、奈良県五條市出身の作家・川村たかしさんが実に 15 年以上の歳月をかけて綴った、全 10 巻の児童小説です。明治 22 年、十津川村を襲った未曾有の大水害によって、両親も、住む場所も失った 9 歳の津田フキは、北海道への移住を決めた 2500 人の内のひとりとなって、新天地を目指しました。十津川村での災害、過酷を極めた原生林の開拓、北の大地での出会いや別れ。さまざまな困難に直面しながらも、家族や友人、動物たちと助け合いながら、優しく、たくましく生きていくフキの一生が、明治・大正・昭和の激動と共に描かれています。本誌を手にした“十津川の縁”をもつあなたにぜひ読んでいただきたい、十津川の物語がここにあります。

川村たかし

1931 年、奈良県五條市生まれ。奈良学芸大学卒。第 3 代日本児童文芸家協会会長。五條市名誉市民。紫綬褒章、旭日小綬章を受章。五條市の小・中・高校教諭を経て、奈良教育大学、梅花女子大学教授を歴任。1978 年、『山へ行く牛』で国際アンデルセン賞優良作品賞・野間児童文芸賞を受賞。1980 年に『山へ行く牛』『北へ行く旅人たち - 新十津川物語』で路傍の石文学賞、1989 年に『新十津川物語』（全 10 巻）で日本児童文学者協会賞・産経児童出版文化賞大賞を受賞するなど、多数の文学賞に選ばれる。2010 年 1 月 30 日、逝去。





『新十津川物語』が生まれたとき。

『新十津川物語』はどのようにして生まれたのか。川村たかしとはどんな人物だったのか。氏と共に人生を歩んできた妻の喜津子さんにお話を伺いました。

川村喜津子（かわむらきつこ）

奈良県五條市生まれ。聖イトオテルミー学院・名誉講師。長年、民間療法である「イトオテルミー療法」の普及に努める。夫・川村たかし氏の志を継ぎ、十津川との縁を紡いでいる。

物語は十津川大水害から始まる

全10巻、原稿用紙にして実に4000枚を超えた長編小説は、明治22年8月の十津川大水害の予兆を感じ取ったいかだ師たちの、ヒリヒリとしたやり取りから始まる。電気も機械もまだない時代。空は分厚い雲に覆われ、月明かりも地上にはほとんど届かない。山中で聞こえるのは、人間の話し声と生活音、そして動物たちが森の中を歩き、鳴く、命の音。その暗闇の中、「ことぼし」という小さな灯りがフキの家の中を薄く照らしている。やがて雨が降り出し、雨足はだんだん激しさを増していく。三日三晩、降り続く雨。やがて山のあちらこちらから丸太ほどもある水柱が噴き出し、次々と異変が起こり始める。

--家がキシキシと鳴った。囲炉裏の上で自在鉤が大きく揺れ始めている。外へ目を戻したフキは、目の前の山がひょいと動いたように思った。谷をへだてた高い山の空が、ふっとずれて動いたのだ。あれっと思った時、足の下でやわらかいものがぐにやりとうねった。不快感が突きあげてきた。家鳴りはまだ続いている。彼女は入り口の柱につかまって、「お母ちゃん」と、叫んだ。「地震やよ。」とたんに、ずうーんと大きな衝撃が来た。中にいたものもあわててとびだしてきた。ひさしの下に雨をさけながら目をこらす。そして、みんなは息を思わず飲んだ。右手那智合川の下流へかけて、谷はなんともいえず赤かったのだ。（新十津川物語 第1巻より）--

冒頭からおよそ70ページまでのあいだに、今まさに、目の前で事が起きているのではと錯覚するような臨場感で、山津波の様子が描かれる。その大き過ぎる自然の流れの一部となって、命を終える人々。不安、恐怖、悲しみ。次々と訪れる感情をその幼い体で引き受けて、9歳のフキは、それでも命を諦めずに生きていく。

この物語は、綿密な取材に基づく小説、すなわちフィクションだ。津田フキははじめ、登場人物は誰ひとりとして実在していないが、フキのような体験をしてなお生きた十津川人たちがいたというのは、紛れもない事実なのである。



川村たかしを小説家にした出来事たち

奈良県五條市にある、江戸時代の町並みを残す五條新町の一角に、川村たかしさん・喜津子さんの自宅はある。喜津子さんは五條本町の出身。二人の子どもを育てながら、市の英語教師として働いた後、「イトオテルミー療法」に出会い、広く普及に努めてきた。一方のたかしさんは旧牧野村の出身。兼業農家の家に生まれ、幼い頃から牛がそばにいる生活の中で育ったという。初めてたかしさんの実家を訪れた時も、「家の中に牛がいて驚いた」と、喜津子さんは笑う。

「そらびっくりしました(笑)。でも川村は言うてました。『母親が田植えをしながらいろんなことを教えてくれた』と。俳優の倍賞美

津子さんは、『川村先生の作品は土の下の虫や、いろんなものを描いているから好き』と言うてくれていました。ある日、私が庭の草をひいとったら、『草ひきすぎたらコオロギの住むとこなくなるわな』って言うんです。農家で育ったからか、あの人はそんな風に、世界を部分的に見るんでなくて、つながる全体として見ていたようなところがありましたね」

たかしさんは、奈良学芸大学を卒業後、小・中・高校、定時制高校、大学、大学院と順を追って教員を務めた。そのため教え子も多く、夏と正月にはたくさんのお学生たちが訪ねてきた。「女の子は振袖を着てきたり、賑やかだった」と、喜津子さんは当時を振り返る。

小説を書き始めたのは1958年頃のこと。子どもに読ませる本がなかったことが、執筆のきっかけだった。たかしさんは次々と作品を書き上げ出版社に持ち込むが、陽の目を見る日はなかなかやっとなかった。書き続けて10年目の1968年、実業之日本社から『川にたつ城』を出版。ダムによって消えていく村を描いた。このデビューを皮切りに、書き溜めた作品を次々と発表していく。そして、さらに約10年後の1977年に偕成社から出版した『山へいく牛』で、「国際アンデルセン賞優良作品賞」「野間児童文芸賞」を受賞した。『新十津川物語』を執筆中のことだった。

半生をかけて紡いだ十津川との縁

たかしさんの取材は独特だった。「取材」と称さず、小説家と明かさず、ふらっと誰かを訪ね、ほとんど物を言わずに、ただ相手の話に耳を傾けた。「取材」と言ってしまうと、普通に日々を過ごしている人たちは構えてしまい、ありのままの言葉が表れてこなくなるからだ。新十津川町に入った一年目も、そのやり方は変わらなかった。住民から警戒の目で見られたというのも無理はない。

二年目は町役場を訪ねた。当時の町長は富山出身だったものの、副町長が十津川村に縁のある人だったため、協力的に動いてくれたという。木造の役場の一室で、住民に説明する機会が設けられた。集まった年記者

の中に、実際に11歳で災害と移住と開拓を経験した94歳の後木喜三郎さんがいた。体験者の話を聞いたことは何よりの幸運だった。後木さんはこの年に亡くなった。

たかしさんは徹底的に取材する人だった。とにかく歩き回るため、足のママが潰れ、靴底に血がにじんでいることも度々あった。それを見た喜津子さんは、「絶対に不満を言ったらあかん」と思ったという。「並大抵ではないんです。取材は…」と喜津子さんは静かに言った。

新十津川物語の第1巻『北へ行く旅人たち』が出版されたのは1977年の12月のことである。たかしさんが紀伊半島に着目し、

「十津川村から新十津川町に移住した開拓民たちの物語を書こう」と決めたのが1972年。構想を描くまでも取材が必要であるから、構想・取材・執筆に5年以上の年月を費やしたことになる。そして最終巻となる第10巻『マンサクの花』が出版されたのが1988年。1991年から1992年にかけては、NHKが放送した全6回のテレビドラマにもなった。それ以降も、新十津川町内に、教え子たちの合宿所となる家屋を建てて、度々ゼミ生たちと訪れた。建物は「ライティングハウス」と呼ばれた。40歳で始まった十津川との縁は、たかしさんが80歳で亡くなるまで続いた。



人間を、自然の大きさを、描きたかった

朝、自宅を目を覚まし、朝食をとった後、たかしさんは「行ってきます」と言って家を出た。執筆するために、自宅の隣の書斎棟に向かったのだ。午前中いっぱい執筆すると、12時前には帰ってきて、昼食をとる。また書斎棟へ出かけて行き、17時には帰ってきて、テレビの野球放送を見ながら一杯やる。執筆期間のいつもの風景だった。

そんなある日、たかしさんがぼそっと「あのなあ、これ書いていたら難儀やわ」と言ったという。「なんで？」と喜津子さんが聞くと、「勝手に人物が動くねん。俺はこっちや言うのに、引っ張られていってしまうねん。難儀やわ」と、ぼやいたと言うのだ。

たかしさんの頭の中には、きっと現実と見紛うような『新十津川物語』の世界が、現実と別に存在していて、たかしさん自身もその世界の住人となって、フキや、そこに生きる人々を見つめていたのではないだろうか。本編中に、登場人物が幾度となく猛吹雪にあう場面が出てくる。「みんな、先生は吹雪にあったことがないのよう書いたなと笑うんですが、いっぱい資料を読んで、頭の中で練るんでしょな」と喜津子さんは言う。きっとそうだろう。たかしさんはその世界で、猛吹雪を本当に体験しているに違いない。

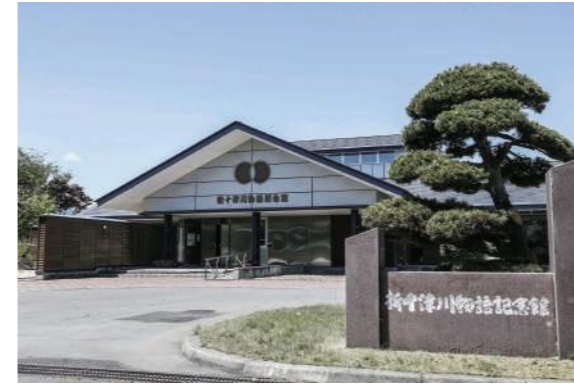
だからこそ半端が許せなかったのかもしれない。書き上げた第9巻の原稿に納得がい

かず、270枚もの用紙を全て捨てて書き直したことがあったという。そうまでして伝えたかったこととはなんだったのか。

「人間を描きたかったと違いますか。それと、自然の怖さというか、自然の大きさを描きたかったんだと思います。でもね、あの人は本当に私には何も言わない人やったから、私はよう知りまへんねん(笑)」、そう冗談を言って喜津子さんは笑う。しかし、周囲では、フキと喜津子さんのキャラクターがよく似ていると、もっぱらの評判である。たかしさんはもしかしたら、現実では照れ臭くて話せないことを、物語の中にいる奥さんに、たくさん話していたのかもしれない。

新十津川物語を体感する

十津川村と新十津川町それぞれに『新十津川物語』を体感できるスポットがあります。



新十津川物語記念館

新十津川物語の原稿や、物語ゆかりの地、歴史など『新十津川物語』を資料で紹介しています。NHKが制作したドラマ『新十津川物語』のダイジェスト版も上映。ロケで使用した小道具・衣装類・ドラマ撮影風景のパネルなども展示されています。

新十津川町字総進188番地6 0125-76-2995
10:00-16:00 (11月1日～4月28日は休館) ￥大人140円 小人70円



新十津川町開拓記念館

新十津川町の開拓の歴史を伝えるため、昭和55年、開町90周年を記念して建設された資料館。館内には「新十津川の自然と歴史」「母村・十津川村の自然と歴史」「十津川団体の移住と開拓」など、新十津川の歩みを7つのテーマに分けて展示しています。

新十津川町字中央1番地1 0125-76-2622 10:00-16:00 (金曜日は10:00-13:00 / 11月～4月は休館) ￥大人140円 小人70円



新十津川町農業記念館

昭和41年に元新十津川信用購買組合の建物を改造して開館した旧開拓記念館を移設改装し、大正10年に建てられた同組合の当時の外観に復元。館内には、農業に対する先人らの幾多の苦労を伝える資料を展示しています。

新十津川町字中央1番地1 0125-76-2622 10:00-16:00 (金曜日は10:00-13:00 / 11月～4月は休館) ￥大人140円 小人70円



十津川村歴史民俗資料館

坂本龍馬と親交のあった十津川郷士・中井庄五郎に送られた、龍馬からの手紙や佩刀が展示されているほか、明治22年の十津川大水害に関する記録、当時の暮らし、道具、人々の信仰にまつわる資料などを見ることができます。

十津川村小原 0746-62-0137
9:00-17:00 (火曜定休 / 年末年始休館) ￥大人300円 小人150円